
RIP

椿野 草花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RIP

【Nコード】

N5200L

【作者名】

椿野 草花

【あらすじ】

消失ウイルスが蔓延する世界で、葉室京介と八年近くもパートナ―を組んでいた初音ミクは消失ウイルスにより内側から壊れ始めていた。

歌も歌えず、最新の記憶も覚えていられないミクとマスターのとある一日。近すぎて遠い二人の物語。

プロローグ／余計なお世話／

私のマスターはよくくだらないことをしている。

「ねえ、ミク」

「はい、何でしょうか」

「新しいあだ名を考えてみたんだけど」

「……聞きたくないのです」

私の答えにあからさまに狼狽しながら、マスターは言った。

「ちょ、ちよつと早くない？ 却下するの」

私はマスターを虚ろな目で見ながら、軽く舌打ちした。

「マスターのあだ名でまともなものがありましたか」

「仮にもマスターに。すごい事を言うわねえ」

私は皮肉を込めた笑みを浮かべる。

「そうですね。マスター（ご主人様）に今の態度は不敬ですよね。ですけど……マスターのあだ名はふざけてんのかと首根っこをつかみたくなるという時があるんですよ」

思い返すのも気分が悪い思い出が蘇ってきた。私の冷めた態度にマスターは何故か胸を張ってきた。

「大丈夫。今回こそいいあだ名を考えてきたから」

「だから聞きたくないです」

「ええと」

私の話も聞かずにマスターは満面の笑みで言った。

「ネギ姫MIXってどうかしら」

「もう……帰ってください。ネギに謝ってください。もうこの話題はやめろって言ってんだろと私は宣言します」

「ミクどんより良いでしょうか？」

「さらにひどい事になってます」

「何それ。わがままね、うちの子は」

「ええーと言っときます」

というか「わがまま」の定義ってなんだろうという話だと思った。
勝手すぎるというか。

私の心情をよそにマスターは鼻をすんすんすりつつ、化粧台に座って化粧しだした。みるみるうちに顔が整えられていく。

マスターはそれほど化粧しなくてもいいような程に顔は整っている。けれどマスターの化粧はかなりこだわって行われている。

きっちり作りこまれた顔じゃなきゃ外を歩けないのだ。

腹の底からいらついてくる。

私は棚の上に置かれた笑顔の初音ミクとマスターの写真を見た。消失した初音ミクが笑っている。そのミクに用意された私はここでふてくさっている。

マスターの顔を見つめた。

マスターは私を愛してくれていると思う。

だってそれが消えたミクの最後の望みだった。そして消えたミクはマスターの中の誰にも触れられない程高い位置へと位置づけられた。一位とか二位とか順序づけることが無為な場所にいつてしまった。

それに嫉妬する自分。

消えたミクの遺言を本心だと勘違いしてるんじゃないかという疑念……そうだったら恐ろしいという怯え。くだらない事で私との距離間をはかるマスターに気持ちの波が逆立っても、そうされないと変に寂しくて物足りない自分。そんな日常に流されたがっている自分。いつか、いやきつといつの間にかそんな日常に慣れて当たり前になるのだという予感がする。寂しくて悲しくて変に温かい気分になった。

私は音楽を流した。ちらりとマスターを見ると自分とミクが映る写真の前で胸に拳を添えながら目を閉じている。

いつもの事だ、うらやましいと思いつつ私は目を閉じる。今日訪問するマスターの曲を初音ミクが歌っている。マスターと私が一番つらい時期にずっと寄り添ってくれた歌だった。何度も聞いているか

らすっかり私の子守歌のようなものになっていた。私はまどろみながら昨日マスターの言った言葉を思い出した。

「貴方はまっすぐな良い性格をしているけど。そのまっすぐさは色々なものを追いつめるわ……その心意気は本当にかうんだけどね」

マスターは優しい。その優しさに私は勝手に憤り、苦しんで、自己嫌悪する事も多い。

だけど大事なマスターの言葉を振り切っても、私は自分の行動を押さえられそうになかった。一言で言えばそれは絶対「余計なお世話」なのに。

第一話（sideミク）

ボーカロイドは夢を見ないらしい。

電話が鳴る音で目が覚めた。

頭は重くてぼんやりとしている。それでも何とかベットからでて受話器を取ると、耳に馴染んだ優しい声が聞こえてきた。

「おはよう、起きてる？ 今日の集合はXXXだね」

その言葉で一気に意識が覚醒する。

そうだ、今日はマスターと出かける日だ。

一人暮らしをはじめてから、はじめてのデート。受話器を強く握りながら時計をみると、約束の時間の一時間前。準備して家を出て何とか到着できるかな？ と疑問符をつけてしまうほどの時間しかない。

きっとマスターは私の今の事態を見越して電話をかけてきたのだろう。

私はろれつがうまく回らない口調で言った。

「は、はい。そうです！」

「慌ててるなあ。大丈夫か」

心配そうなマスターの声。

私は言った。

「だ、大丈夫です！ えっととにかく約束の時間に会いましょう！」
がちやりと乱暴に私は電話を切る。

慌てて着替えて、鏡を見てしわを直す。

中が見えないようにスカートの形に気を使った。お気に入りの女の子らしいピンクのスカート。それからマスターがくれたお花の髪飾りをつける。

どこかの私が歌う曲が私の記憶に流れ込んで、私の認識する世界が

混乱する。現実と記憶の境界が……ゆるやかに溶けていく。止まったり、はやまったりしながら、確実に。

「よし出来た。さて、早く行かなきゃ」

独り言を呟いて、私はドアノブに手をかける。一瞬偏頭痛。

あれ、どうして私は痛みを感じたのだろう。だって私はゼロと一に還元される存在なのに。

ドアを開けると風が吹き込んできた。

思わず髪の毛をおさえて外を見ると、あるのは闇。私なんてかけら残さず消してしまいそうなくらいに深い深い闇。一步足を進める事なんて出来ない。踏み込んだらきつと戻れない。ここに、いやマスターの所に。

終わりたいくない、終わってしまう。

葛藤し続けて、やがて頭がぼんやりとした。

ねえ、楽になろう……身体に沁みる甘い囁きが聞こえる。

腕に抱えた見えない全てを投げ出すように、私は大きく両手を広げて闇に落ちようとした。

闇は肌にぴたりと寄り添う、とても温かくて馴染んでいるのが不気味で涙が出そうなくらい優しかった。

目をぱちりとあけて、勢いよくベットから起きあがる。肩で息をしながら、目の前に花柄の布団を強く握った。しわの寄った布の感触が私が現実という場所にいと教えてくれた。

また夢を見た。

痛みを感じないのに、痛みを感じる。

マスターのパソコン内にある部屋で暮らして、データの世界でしか生きられないのに、私は別の私の歌った曲の内容を現実と勘違いして、外に行こうとする。

夢での私は人間みたいだった。本当に目の前でマスターに会えると

思っていた。そんなのありえないのに。

私は自分の喉に触れながら声を出す。よかった。まだ声を出せる。

「いちご」

いちごの姿を思い出せる。

赤くて甘い果物。丸みをおびた三角形の形。

「ケーキ」うん、形は思い出せる。味も思い出せる。とても幸せになれるもの。イチゴがのったショートケーキのデータは特においしい。

そうだ、今日は、今日こそ出来るのかな。

すうと息を吸い、胸を張る。

「やさしくすれ……」

歌い始めた途端、喉がつまる感覚、言葉が止まる。音に対する感覚が真っ白になる。視線を当てもなくさまよわせながら、どうにか思いだそうとした。しかしわからない。やっぱり忘れている。歌い方は前は歌えなくても喉にひっかかるような感じがして、何回も繰り返せば、たどたどしく歌えたのに。今の私の中では何もひっかからない。歌うという事がどういう事か、もうよくわからない。

この歌、好きだったのに……私は何度も歌う事に挑戦した。何回も繰り返したら、もしかしたら奇跡的に思い出せるかもしれない。

私はすぐるような思いで歌う事に挑戦し続けた。時計の太い針が四から九に変わった。

だけど、駄目だった。

何度も試して失敗するたびに、焦燥感が押し寄せてくる。同時に自分に対する失望が乾いた音をたてながら私の心を潰そうとした。

私は目をつむり、身体の中で荒れ狂う感情を何とかこらえようとした。

吐息は震えていた。けれど衝撃のあまりか涙も出てこない事が幸いだった。

感情の熱が胸を中心に全身をかけめぐって暑くて苦しいけど、もう

少ししたらマスターがパソコンを起動する。涙や涙の痕を見せたくない、マスターもいっぱい苦しんでるから。私のせいで、マスターの心はいっぱいいっぱいだから。

けれど歌を完璧に歌えなくなるのは首もとに冷たい刃をつきつけられるのとほぼ同じだ。もうひと押しで私は……何も出来なくなる。背筋が凍る。

やだやだ、やだ。怖いよ。

歌いたいよ、歌いたいマスターの歌を。

それが私の存在意義なのに。マスターとのつながりだったのに。

受け入れたと思っていた事が、全然受け止め切れなかった自分が嫌だった。

だけどこんな姿をマスターに見せたくない。

頑張ろう、頑張って「普通」をやろう。私はテキーラと呟く。口の端があがり不器用な笑みが鏡台に映った。

第二話 (sideマスター?)

「マスター。歌えなくなりました」
ミクは言った。

僕のパソコンの中にある小さな彼女専用の部屋でお茶というデータを味わいながら。

僕もミクと同じお茶を飲みながら。

「そっか、しょうがないな。でもまだきちんとしゃべれているよね」
「はい、まだその所は」

僕は小さく笑った。

「それならミクは大丈夫だよ」

僕はお茶をいれたカップを見た。

お茶の水面が驚くほど静かだ。ずっと前から知っていたからだろうか。かすかに怯えを秘めたミクの目を見たからだろうか。

そうかやっとなのかという奇妙な安心と自分の落ち着きぶりに不気味さを覚えた。

僕は言った。

「そうだ、ミク。この前、おいしいクッキーの店を見つけたんだ。食べない？」

「レーズン、入ってませんよね」

「入ってない、入ってない」

ミクは不信なものを見る目で僕を見た。お茶が後ろのテーブルに置かれミクの視線から外れる。

八年近くコンピを組んでいるというのに。

ミクはうらみがましき漂う低い声で言った。

「マスターは結構いたずらが好きです。この前だって、私が辛いのだめなの知ってるくせに、チキンの盛り合わせに辛味チキンを仕込んで。辛くて騒いでる私、笑ってませんでした？」

う、変な記憶の保持は出来てるな。随分前の話だった気もするが。

「大丈夫だって、そんな事をしてないよ。うん」

「一応……信じてみます」

ミクの目は疑いの眼だった。

僕は苦笑して立ち上がる。

「ちょっとリビングにあるクッキーをとってくるよ」

ミクはちょこんと正座して、小さく頷いた。

「待ってます。忘れちゃうかもしれないんで、早く来てください」
それからミクは小首をかしげた。

「マスターだけお茶飲むなんてずるい。私にもください」

「すぐ用意するよ」

僕はそっとテーブルにのせられた中身のあるカップを回収して、新しいお茶を彼女の手に移した。

視線を外した瞬間に多分消えてしまったのだろう。飲んだ事を。

「あったかい」

彼女はふわっと幸せそうに笑った。

リビングに行ってクッキーのデータが入ったフラッシュメモリーを手にとると、携帯電話が鳴った。

待ち受け画面には春日井明里という名前があった。

「葉室君、おはよう。ミクちゃんの調子はどうかな」

快活な女性の声。

「はい、今朝方歌えないと自覚しました。割と落ち着いてますね」
パソコンの内側から少しずつ壊すウイルスが今世界中ではやっていた。

ミクのかかったウイルスを根絶させるために作られた団体に参加している明里さんは僕とミクを支えてくれる人だった。

「どうすればいいですかね」

「自覚したなら、団体のホームページから治療用のプログラムが公開されているし、それをとにかく彼女に」

「明里さん。ミクに渡すプログラムのデータがかなり増えてますよ」

ね」

「……あのウイルス。常に学習してて、治療プログラムの耐性が出るもんだから。データがどうして増えるのよね」

何かあったのと冷静な声で明里さんは尋ねてきた。

「ちよつとミクが辛そうです。入れた後ぐったりしてます」

「そうなの。じゃあ今日葉室君の所に訪問する日だったし。ミクちゃんを見てからその事について考えましょうか」

「お願いします」

「いえいえ、うちのミクがミクちゃんに会えるの楽しみにしてるのよ」

そこで明里さんは軽く息をついた。

「実は今新しいあだ名が気に入らないのか、怒ってるのよね。ミクちゃんにあつたら機嫌直してくれるわ」

「はは、相変わらずですね」

軽く苦笑すると、柔らかい声で明里さんは言った。

「ええ、本当相変わらずよ。とってもかわいいのよ、うちの子は。」

口が悪いけど、冷たい目で見るときもあるけど。かわいいわ」

一年半前まで明里さんの側にいたミクは、ウイルスにかかって跡形もなく消えてしまった。今明里さんの側にいるミクは、消えたミクが最後に用意した初音ミクだった。

明里さんは、あの子の娘は私の娘とかわいがっていて、よくすげなくされている。

でも僕はうまくいかなくてしょんぼりしている明里さんを、ミクが心配そうに見ていることを知っている。触れられないけど、だからこそ精一杯明里さんを心配している。

一度そのことを指摘したら「マスターには馬鹿なところがありますから、私がちゃんと見ないといけないのです」と早口で言っていた。凶星だったのか、目は大きくなり唇が細かく震えていた。分かりやすい子だった。

「ではお待ちしていますね」

それから僕は明里さんが来る時刻を確認して礼を言ってから電話を切った。

さてさっさとクッキーを持っていかないと、ミクが忘れてしまう。まあでも忘れたら忘れたでサプライズになるのかなと思った。

第三話（sideマスター？）

ミクとお茶をしてから、明里さんが教えてくれた治療プログラムをミクに入れた。ミクはデータの重さに少し息を荒くして、顔色が悪く疲れていた。ミクは横になると言ったので、僕はミクのいるパソコンから少し離れたテーブルの上のパソコンで仕事をした。

集中するためにメガネをつけて事務作業をしていると、口元が寂しくなってきたばこを吸っていた。

「マスター、たばこ吸ってるんですか」

ベツトに横になりながら、ミクが聞いてきた。

「え、ああ」僕は手をとめて、くわえたたばこを指でつまんだ。

「おいしいんですか。たばこって」

「別においしいくないよ。ずっと根を詰めてるとね、吸いたくなるんだ」

「そうですか。そういえば一度だけ私の目の前で吸ってましたよね。確か……「言の葉」を作ってた時でしたか」

「あーあの時か。そういえば吸ったな。お前目の前でたばこを吸われるの大嫌いだって知ってたんだけど、つい吸ってた」

僕は小さく笑った。

「すっごい嫌でしたよ。本当。一生懸命歌ってたら、マスター、たばこ吸って目を虚ろにしてたんですから」

「まあ。そうだったな」

三年半前の話だ。

僕は勝手に追い詰められていた。いつも曲を投稿しているサイトで、何曲か続いて僕は評価を受けていた。はじめは戸惑い混じりで嬉しかった。何年も地道にミクと歌を作り続けてきた。長年の苦勞が報われたと思えば、胸がいっぱいになった。二十年の人生で味わったことのないほどのたくさんの褒め言葉。期待される声。嬉しくて嬉しくて、もっと嬉しい気分になりたくて、聞く人に喜んでもらいた

くて、頑張った。だけどいつしかその褒められる言葉が、期待する言葉が僕を追い詰めてた。たくさんの言葉が、期待が僕を締めつけた。

「なんだ、期待はずれか」

「マンネリ」

「そんな事をいうなよ！ 最高だ！」

「前の曲みたいなのつくってほしいなあ」

声が、言葉が、怖くなりつつあった。パソコンの画面の向こうで僕の曲を聞いている人の事を考えて頑張ろうとする自分がいた。確かに認められたかった、評価されたかったけど、僕の創作の方向性とはあきらかに違う方向へ進んでいくのを感じていた。少し、疲れていた。

そんな僕にミクは自分の作りたいように作ればいいと活を入れた。だけどミクに活を入れられた事が僕は情けなくて恥ずかしくて、自分の曲を好きだとどんな時でも笑いながらついてきたミクに、自分の本心とは違う曲を歌わせているかもしれないと思うと辛くて思わず声を上げてしまい喧嘩になった。

「マスター本気でキレてましたね。あの時」

「そんなことないよ」

僕が否定すると本当かなあと呟きながら彼女は頬を膨らました。体の調子は戻ってきたのかベットから起きあがっていた。

「あやしいな」

にやにやと笑う彼女に僕は小さく息をついた。まったく思う同時にほんとと安心する。

彼女の中にいるウイルスは、感情を不安定にさせると活性化する。心の隙間を縫ってどんどん彼女から彼女であることを失わせる。

「しつこいぞ、ミク」

だから笑ってほしかった。けれど自分の痛い話をほじくり出されるのは、苦しくなるのも事実だが。

僕は子供っぽい、意地っ張りな態度で言った。

「とにかくキレてなんてない」

ま……実際はキレてたんだが。認めるにはあまりに情けなかった。自分のパートナーに凶星な追求を受けて、心配されたあげくにキレるなんて、絶対言えない。

「意地悪ですね。マスターは消失ウイルスに感染した哀れなミクに
お慰みとして教えてくれないんですか」

自分で大仰に彼女は言い出した。

小さく吹き出しながら僕は彼女を見た。

「バカ、何言ってるんだよ。病人特権なんて通じないぞ、僕は」

彼女はけして病人じゃない。

病気が日常に溶け込んでしまったボーカロイドだ。

だから健常ではないけど、いずれ消えてしまいうけど、病人だとは区分したくない。

離したくない。離れて欲しくない。

何度もぶつかって、ひどいときは罵り合う位けんかしたけど、でも一曲、一曲二人で作って、作るのに夢中になりすぎて何度明け方を迎えただろう。お互い緊張感が薄れて一気に疲れが襲ってきて。

「ブラックコーヒーなのに効かないですねえ」

「すっかり慣れちゃったからね……」と寝ぼけ眼でお互い見ながら
呟いてた。

そして明けの柔らかな赤と深い青の混じる不思議な空を見ていた。
いつのまにかマスター（主人）が歌わせるソフトという関係は崩れて
いた。

彼女は一番大事な仲間の一になった。

あのミクの発破をかけられた喧嘩の後、本当に注目されるのが気持ち
よいのだと自覚した後。

その妄執じみた感情を断ち切りたくて、本当に自分の好きなような
曲を作ってミクに歌わせた時、彼女の笑みが、嬉しくてたまらな
かった。彼女との間にはあまりに思い出がありすぎる。

ミクはもうただのソフトじゃないくらいの存在になっていた。
だからこそ……ウイルスにかかったミクの慟哭の声が耳にこびりつ
いて離れない、忘れられない。

昔話をして笑っている今でも、ほんの少しその事を意識するだけで
(それが視界に入っただ程度の意識でも)感情が止まる。

正直今の僕はいつ笑えるようになったのだろう。何度も壊れる覚悟
を決めたときから？

それとももうすでに感情は壊れてしまって、笑うという仮面をつけ
ているだけなのではと疑いたくなる瞬間がある。そうだったら楽か
もしれない、ただあまりに不義理だ。

本当ミクはどれだけ苦しくて嘆いたのだろう。想像がつかない。

「京介。私壊れちゃうんですか。歌う事が存在意義なのに、それも
忘れて。最後に京介を京介だと認識できなくなっちゃうんですか」
彼女は何度も涙目で画面を何度もたたきながら叫んだ。

「嫌、嫌です。そんなの。京介の曲を歌いたい。歌い、たい」

パソコンの小さな箱の画面の中で泣き崩れる彼女に僕は手も差し出
せなかった。安っぽい言葉をかけることしかできなかった。だけど
いつか遠くないうちにミクは泣き叫ぶことも忘れることも笑うこと
も出来なくなる。彼女は一人で消える。

僕はその時も何も出来ないのだろうか……

第四話（sideミク）

午後にマスターのお友達の明里さんが来ると聞かされた。明里さんのミクも一緒だと。

正直マスターの言葉に相づちを打ってはいたが、明里さんが誰なのか私は察しがつかなかった。多分最近知り合った人なのだろう。

昔からの知り合いならすぐに察しはつくが、最近の記憶が本当にもたない。私の中にある過去のある時点より先が刻めない。

今というデータが、認識が、上書きされなくなりつつある。時々、自分が何をしているのか分からなくなって、怖い。私が見えている景色は、本物なのだろうか……。現在のデータなのか、それとも過去のデータ（思い出）なのか。

怖いのに……。正直昔を思い出すのは頬がとろけちゃいそうなくらい甘くて、だるい。きつといくらでも。溺れても良いくらいに過去をたゆたう自分がいる。

このまま癒される思い出にひたってしまいたくなる。それがいずれ過去を通した認識になるなんて。今をなくすなんて。

今はまだ「今」の認識のままマスターの側にいたいよ。

だってマスターとの思い出はたくさんあります。

だけどだからこそあの人……。シナセテクレナカタノニネ。

「ミク。どうした、ぼんやりして？」

声をかけられて私はびくりと背中をただしながらマスターを見た。手にはアルバムが広げられていて、床には何冊ものアルバムが積み上げられていた。

「えーと、何でもないですよ」

「そうか。そういえばアルバムの整理はどれくらい進んだ」

「……私、そんな事をしてましたか？」

マスターは一瞬しまったという顔をした。

それから何でもなさそうな軽い調子で言った。

「うん。明里さんのミクちゃんにも手伝ってもらいながらやって言ってたよ。とりあえずどうするか今広げた所みたいだったよ」

そうだったのか。すっかり忘れてしまっていた。こういう時、マスターに説明してもらうと本当に助かる。さっきの表情が気になるけど、私は私の判断が正しいか分からないしそもそも怖くて信じられない。素直にマスターの言葉を信じるしかない。

明里さんって誰だっけ、思い出せない。

明里さんがどういう人物なのか、マスターに聞くと半年以上前に知り合った友達だよとマスターは言った。

そうか、マスターの友達か。ここ最近の知り合いなのだろう。昔からのマスターの側にいる人物ならすぐに思い出せるのに、ここ最近の人物だと記憶の保持が出来ない。そういえばさっきまで何かを考え込んでいた気がしたけど、何だっけ。マスターが電気を無駄遣いしているか、いないかだっけ。

そうだ。そうに決まってる。

ついこの間だっけすごい額の請求書がきたんだし、ちゃんと言わなきゃ。

「そうだ、マスター。電気の無駄遣いしちゃだめですよ。使わない部屋の電気はすぐに消さないよ」

「ああ……うん。気をつけるよ。ミクはしっかりしてるなあ」

こっちは真面目に言っているのに、何かを懐かしむ目をしながら、しみじみとマスターは言った。その姿に私は少しおかしくなっていくすりと笑った。

「何言っているんですか。当たり前前の事いってるだけですよ」

とりあえず明里さんという人のミクに私のアルバム整理を手伝ってもらうことにして、私は本棚から単語帳を取り出して、ページを開

いた。少しでも症状を遅らせるために私は勉強する。

メロンパン、時計、傘等々がどんな形で、何なのか。何度も思い返してきちんと認識する。

それが終わると私はCDをかけた。

「初音ミク」の歌や、他のボーカロイドの歌を聴いた。昔から聞いている、耳になじんだ音楽を。

今流れるほかの私やボーカロイドも聞くこともあるが、何というか落ち着かない。どんなに素敵な曲でも何度も聞きなおしても覚えていられるか不安で、最近ほとんど聞いていない。過去に意識が移りだしている関係で、どうしても昔から聞いている曲が落ち着いた。そもそも思わず引き込まれてしまうほどに凄い、新しい曲は聴いていて苦痛だった。

「A l i c e」が流れ出した。

突き放しているような言葉を吐きながら、その言葉の節々から胸が詰まりそうなくらいの柔らかい熱と優しさが伝わってくる曲だ。失恋曲らしいのだが、マスターは最初曲のコンセプトを何も知らずに聞いたらしく、死者の大好きな生者に捧げる曲に聞こえたそうだ。

早とちりですねえマスターと昔言っただけ、今はここまで誰かに想いを残せる歌を残したいと思う。相手を見守る優しい歌を、マスターに残したい。

だけでもうそんな事が出来る余裕はどこにもない。いまの私の思うことが本当なんて、自分ですら信じられないんだから。

きつともう私に出来ることはほとんどないんだ。

きみは一人でゆくんだぜ

この歌詞が耳に響いた。

その時がきたら……頭がぐらりと揺れる。

何だか深く思考すると、眠気がおそってきた。思わず横になってうとうとし始めると、部屋のドアが開いて誰かが入ってきた。

「こんにちは。なんだか眠そうですね。アルバムの整理が出来る状況でしょうか」

はきはきとした口調をした強い光を目に宿した初音ミクが私の肩をゆらした。

「起きてください。お願いします」

強引さを感じる肩の揺らしかたに、気分が少し悪くなった。

「やだ、ちょっと眠いの」

「眠ったら良くないです。あなたのマスターが呼んでいるんですから」

「え」

私は一気に体を起こした。マスターが呼んでるならすぐに起きなきゃ。いったいなんだろう。私は言った。

「す、すぐに行くわ」

「よろしくお願いします。私もマスター明里の所に行きますので」

「う、うん」

私がこくこくと頷くと、見知らぬ初音ミクは部屋を無愛想というか無表情で出ていった。

何となく怖いなと思った。

第四話 (sideミク) (後書き)

作中 古川P 「Alice」より。

第五話 (side マスター?)

来ると言った時刻から五分過ぎて明里さんはやってきた。明るい茶色のボブに目鼻立ちがくっきりした顔、上品な匂いの香水をつけて、にこっと子供っぽく笑っていた。

「一ヶ月ぶりですね。明里さん」

「そうねえ。前は二ヶ月も期間が開いちゃったけど、今回は早めに来れてよかったわ。早速だけどミクちゃんの様子はどうか?」

「今日、歌えない事をはっきり自覚したみたいです」

「メールで教えてくれたけど、正確に歌えなくなったのはいつかな」

「前回、明里さんが来た後すぐです」

「そう……うちのミクもそうだったわ。すぐには自覚しないのよね。たまたま調子が悪いと思ってしまいうから。けど実際歌えないから、その現実とのギャップが、自分は歌えないという事を少しずつ自覚させていくのよね」

明里さんは静かな声で説明してくれた。

確かにそうだった。

ミクは今日まで歌えないのに歌えると思っていた。歌えないのはほんのちよつと忘れただけとか、調子が悪いとか、たくさん理由をつけていた。そうなんだと決め込んでいた。だがここ数日はそのギャップを自覚していたのか、歌うという事をためらっていた。億劫そうだった。歌うソフト「初音ミク」であるに関わらず。

「あ、ミクが戻ってきたみたい」

明里さんはそう言いながら携帯電話を開いた。画面に明里さんの初音ミクが映る。うちのミクとは（当たり前だけど）そっくりな容姿だが、声がやや低く、目つきがだるそうな印象を受ける子だった。

「葉室さん、一つお聞きしてもよろしいでしょうか」

明里さんのミクはじつと私を見た。

「ん？ 何かな」

「……いつからあなたの名前はマスターになったのでしょうか？」

前回マスター明里が来た際はあなたのミクは確かにあなたを京介と呼んでいた」

まっすぐに理性ある視線を明里さんのミクは向けてくる。僕は小さく笑って言った。

「数日前からかな……」

「僕の名前が分からなくなったんだ。それで、きっと昔から最近までの呼び名で言い慣れていたからかな、うん。マスターと呼び出したよ」

唇を真一文字に結ぶ。ちよっと思いついてしまったから。ミクがあれどなく笑いながら、普通に当たり前のように僕の名前を忘れて、マスターと呼びだした事を。

呆然として、一瞬訳が分からない激しい感情が体の内側から引き出された。しかしすぐに一気に自分の感情を否定しつくす理性に抑えこまれた。自分が今動揺して、ミクに僕の名前を忘れたのを悟られるのはまずい。一番彼女を傷つけるし、感情を表にしたら、それをおさめる手段が分からない。だから二人が来てくれてほっとしたし、明里さんのミクがこの事を追求してくれて……肩の力が抜けたと同時に胸が痛い。喉に石ころが詰まっているのかと思ってしまう。

「どうしてすぐにこの事を、マスター明里に報告しなかったのです。管理者であるあなたの名前、固有名詞を忘れた事は報告すべき症状であります。……歌えないという事以上に」

知っていた、そんな事は。

「もっと詳しく説明をお願いします」

僕は明里さんのミクから目をそらした。

「マスター京介、どうしました？」

「ミク、ちょっと下がちなさい」

明里さんが言った。

「しかし」

「いいから」

食い下がろうとする明里さんの声が一瞬低くなる。

「はい、分かりました。マスター明里」

携帯電話の画面から明里さんのミクの姿が消える。明里さんは頭を下げた。

「申し訳ないわ、失礼な事を言って」

僕は首を横に振った。

「いや、彼女の言う通りですよ。言うべき事を言わなかった自分が悪いです」

そう本当に、僕のぐずぐずした部分がいけないんだ。

「あの子には人の心について、よく言い聞かせるわ。申し訳ないわ、本当」「本当大丈夫ですよ、全然気にしてないです」

明里さんはじっと僕を見た。

「無理をしたら、あなたが壊れるわ」

「……分かってます」

だけど、どこからが無理なのかよくわからない。ミクと同じで僕の状態も定まらないんだ。

覚悟なんて、本当いつになったら決められるのか。覚悟したと何度も思っているのに、ミクの症状が進む度に心がぼろぼろになる。消失ウイルスが自ら思考するソフトにかかるとアンインストールする人間も多いと聞いてはいたが、最近アンインストールをする気持ちがひしひしと分かってきた。ソフトとして役に立たなくなるとは別に、側にいるだけで自分が病気になりそうだった。ウイルスがミクの形だけを残して、内面を荒らし、やがて残った皮を食って消滅する。消えるまでの過程に耐えられない人間が出てきて当然だ……

二人の中で積み上げてきた距離感、波長が目茶苦茶になる。五年前、

電気代がかかりすぎていた事を最近の事だと信じきってる姿なんて慣れる前まで苛立つ、理不尽な理由の一つだった。何度も同じ事を注意し忘れるミクを見る事で、何度も胸が虚無感でいっぱいになった。どうしてこうなったのか、ウィルスのせいだからしょうがない？ 出口がない、入口は揺れ動き崩れた覚悟で埋まった迷路に入ってしまったのだ僕は。確実に分かっているのは、消失という終わり：それを一度として期待した事はないわけではなかった。理不尽な感情は強張った笑みを数えきれない程、僕に作らせた。やがては取り繕うを、覚えたけれど、消えないしこりは胸に残り続けた。

僕は心の中で呟く。

ざわつく心を抑える呪文。

「後悔したくない……」

けれど今日の日々は本当に正しいのかな。

滑稽だなと思うんだ。
だってこんなループ思考を僕は何度も繰り返すんだ。
消せば簡単なのに。

そうしている人間はたくさんいるのに。
だけど切れないんだ。思い出が襲ってくるんだ。思い出がマウスを動かす手を縛りつけるんだ。

……やめろ……やめろ……と何度も、何度も。

「葉室くん、葉室くん！」

鋭い声で呼ばれて僕は顔を上げた。

明里さんが心配そうに僕を見ている。

「え、えっと。どうしましたか？」

「どうって……ぽかんとしていたから声をかけたの」

明里さんは僕の肩口に伸ばしかけた手を引っ込める。

「すいません。最近ちょっとぼんやりしやすくて」

喉が渴いているわけでもないのに、声がかすれる。僕は咳払いをした。

「疲れているのよ。そういう時は

明里さんはバックから小さな袋を取り出して、飴玉を取り出した。

「こういうものでも食べなさい。このど飴はよく効くわよ」

「はあ、はは。ありがとうございます」

軽く笑いながら僕はのど飴を受け取り、そのまま口を切って口に放り込んだ。

くせのある甘さとほろ苦さが同居している。

「漢方で使う薬草が入っているんですって」

「どうりで。本当、独特な味ですね」

おばあちゃんがよく食べそうな感じがするのど飴だったが、喉の調子はあつという間に良くなり気分もすっきりした。最近はおばこでもった気持ちですっきりというか……まぎらしていたが、量が最近一箱を簡単に使い切ることもあって、はまりこんでいく自分が微妙に怖かった。こっちの方はたばこよりずっと健康的だろう（虫歯に気をつければ）

そういえばと思い出して、僕は口を開けた。

「明里さん。さっき仕事をしながらたばこを吸っていたんですけど、そうしたらミクが目の前で僕がたばこを吸って、怒った事を思い出したんですよ」

「葉室くんのミクちゃんはたばこ嫌いだったわね。確か」

「目の前で吸われるのが嫌いみたいです」

「へえ、そうなんだ。でもあなたがたばこを吸うことについては、健康面では気にしているみたいだけど嫌いじゃないみたいよ」

「そうなんですか」

明里さんはしっかりと頷きながら言った。

「いつもと雰囲気が違うからいいって。前にうちのミクに話していたみたい」

「よくわかんないです。その違い」

「ふふ、そうなの。ま、一言で言えばミクちゃんの趣味でしょうね」

「趣味ですか……そういう趣味というか嗜好って、消えづらいものでしたっけ」

名前を忘れたって、好きな事は覚えていると以前明里さんから聞いた。

「そうそう。かなり消えづらいわ。だってその嗜好を失うって事は、思い出や名前をよりも直感的な「自分らしさ」を失うことだもの。たとえどんなに忘れようとも、データで構築された存在であっても、自分を失うって恐怖でしょう…… どんなに欠けたとしてもそのものはそのものであるって一番考え、疑っているのは、きっと消失ウイルスにかかったソフト達。本当大事よ、その嗜好を覚え続けている事は。人によっては最後までそのものである事に縛り付けているって言うかもしれないけど」

僕は首を傾げた。

「どういう事ですか？」

明里さんは僕から目をそらすとゆっくり息をはいた。そして何かを決めたような強い目をして語りだした。

「そうね、例えばうちのミクの場合だったら。最後あの子は私が誰かも分からなくなっていたし、今どういう状況だとか、時間の感覚とかもなくなっていた。だけどね、消えてしまう数日前からあの子は歌いだした」

僕は目を丸くした。

「え、そんな状況で歌ですか」

「もちろんはつきりしたつながりのある言語で歌ってないわ。言葉を用い方なんてとくに忘れてしまったから。音程も無茶苦茶な叫んでいるようにも聞こえる歌だった。あの子は最後……いえ最後まで初音ミクでありたかったの」

歌うソフトという存在意義を保ち続けたかったのよ。

「ミクもそうなってしまうんですかね」

僕の言葉に明里さんは否定も肯定もしなかった。

ふと僕はミクが消失ウイルスにかかった頃を思いだした。

ミクが消失ウイルスにかかったと分かった日からしばらく僕は素人なりにどうにかならないかとウイルスや治療法について勉強した。何とかしたかった、何とかなるんじゃないかと思っていた。藁にもすがる思いで、ミクの明日を探したけど何処にもなかった。

ミクを僕が助けるんだという今思えば何処か傲慢で必死な気持ちでやった勉強は、知識を得れば得る程、そして時間がたてばたつ程、ミクの明日はなくなるという現実を受け入れる勉強になった。いつのまにか自分のための勉強をしている僕を、ミクは独りで見つめていた。

ある日ミクは言った。

「京介、もういいです。もう私のウイルスについて調べなくていいです」

「どうしたんだよ、急に」

ミクはにこっと笑いながら言った。

「私をアンインストールしてください。そうしたら終わります。こんな事は」

間髪入れずに言った。

「馬鹿なことを言うな！ がんばったらきつと治療法は見つかる。ウイルスを根絶させるプログラムがあるかもしれない！」

ミクはゆっくりと首を横に振った。

「けどそれがあるのは今ではないです。そして私は消えるしかないんです、それが現実なんです」

京介だってそれを自覚していないわけではないでしょうとミクは目で語った。僕は首を横に振った。

「知るか、そんなの。そんな現実なんて」

「ふっとばせたら、それは現実なんてものじゃない気がします」僕とミクは押し問答をした。

ミクがもし三次元でうごけるものなら、きっと感情がお互い高ぶりすぎて部屋が滅茶苦茶になるんじゃないかと思うくらい激しいものだった。

僕はいらつきながら吐き捨てた。

「とにかくアンイストールなんてそんな事しないぞ。だいたいんだよさっきから冷めきった言葉吐きまくって、本当そういう事言わないでくれ」

「だけど……このままだったら京介は地獄です。私に引きずられて地獄落ちです。いいんですか、それで」

黒くよんだ目をしていた。僕はその目に気圧されながら、ミクの言葉にこう言った。

「馬鹿馬鹿しい。何変なことを言ってるんだよ……」語尾が震える。激しくて様々な感情が胸の中に煮えたぎっていた。ミクはじっと僕の顔を見た。そして。

「これからの私と居るだけで地獄ですよ。だって今の時点で京介苦しそうじゃないですか」

と言ってミクがぼろぼろと泣き出した。

「ミク……」

ミクは駄々をこねる子供のように、地面に座り込んで手のひらで地面をたたいた。

「やなんです。やなんです！ 京介を苦しませて、辛い気持ちにさせたりしてる自分が嫌なんです。これから歌えなくなって役立たずのぼんこつになって、そうしたら私はいったい何のために存在し

ているのですか。京介に辛い顔しかさせられない。そんな自分なんてもう嫌。消えてしまいたい、さっさと今すぐに！」

ミクは泣きながら叫んだ。

その瞬間僕は悟ったのだ。

ミクを追いつめたのは病気だけじゃない。

追いつめられた「僕」という存在。

確かに知識は必要だ、理解は必要だ。

だけどそれは直接的にミクを救わない。

今必要だったのは、ミクの側でミクの不安に寄り添う事。ミクと一緒に病気を受け入れる存在であること。僕はこう言うしかなかった。

「ごめん、ごめん。お前を追いつめた」

その言葉自体ミクを追いつめると知っていたけど、彼女に触れられない寄り添えない僕は言葉に気持ちを込めるしかできなかった。

パソコンの中で地面というデータを殴るミクの拳が僕に届けばいいのと思った。そうすれば少しは心を救われるような気がした。

だけど十五分も経たない内に、彼女は情緒の不安定さは残り続けたが、この会話を忘れてしまった。

話を蒸し返すのはミクの混乱を助長させる。混乱した彼女に理解を求めたり、説得する事は不可能だった。彼女基準が全部正しい世界に生きているミクは、同時に自分という名の檻に捕らわれていた。そういう時は感情で察するのよ。理屈じゃ駄目だから。明里さんはそう言っていたけど、ミクを壊していくウィルスのせいだと分かっているけど、だけど苛立たしさも覚えずにいられない事もたくさんあった。それもきつとミクは察していたのだろう。

「……諦めないで」

「え？」

「この状況に屈しないで」

明里さんは少し声を震わせながら言った。

「明里さん？」

明里さんは口元を手で隠し、軽く咳払いをした。

「あ……っ。申し訳ないわ。今の葉室君を見ていたら、ちょっとね
思い出してしまった」

明里さんが僕を見て思い出す姿……そうだ、カノジヨはかつて、僕
と同じ立場だった。

口元に笑みを浮かべながら伏し目がちな目で明里さんは僕を見た。
僕は聞いた。

「明里さんも、自分の初音ミクが消失したんですよね」

「そう……ね。ずっと後悔しているわ、あの子に心配をかけたこと、
我慢させたこと……いっぱい、いっぱい」
声に力がなかった。

「私も君みたいに悩んだわ。本当しやれにならないのよ、名前を忘
れられるなんて。今度は何を忘れられる？ 顔がわからなくなるの
はいつ？ みたいにした。そんな恐怖と絶望に私は潰されてしま
った、それをごまかすようにいつまでも変わらない日常を続けてい
た」

それがいい、余計な刺激は相手を混乱させる可能性があるって言わ
れた事。その余計な刺激がわからなくて、ただ穏やかにテレビを見
たりお話をしたり、絵や音楽を聞いたりした事を明里さんは話した。

「だからミクが私を支えるための初音ミクを用意をしていたこと。
歌いながら消失していった事が本当にきつかった。特に後者は夢に
出てくるくらいだった」

明里さんからは何度も明里さんのミクの話聞いたことがある。と
ても純真な優しい性格で、本当明里さんが好きなんだと伝わって
きた。

「歌わせれば良かった……考えてミクが最後まで歌わせる方法を見
つければ良かった。私はあの子に諦めさせてしまった……」

明里さんは僕をまっすぐ見た。

「ねえ。葉室くん」

「はい」

「きつと今が一番辛い時期だと思うの。だけどね諦めないで。絶望に潰されないで。確かにミクちゃんは以前のミクちゃんじゃない。けれどどんなになにもできなくなったとしても、ミクちゃんはミクちゃんなのよ」

安らかな眠ってと祈るしかない私とは違って、あなたたちにはまだ出来ることはある。

だから絶望に辛さに屈しないで、逃げないで。

明里さんの言葉に僕は何も言えなかった。

明里さんの言葉が心の中で広がり続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200/>

RIP

2010年11月14日11時07分発行